

五稜郭(亀田御役所土塁, 箱館御役所, 柳野城)(特別史跡, 百名城)

(北海道函館市五稜郭町)(五稜郭公園)

五稜郭(ごりょうかく)は、江戸時代末期に蝦夷地(渡島国亀田郡)の箱館府(現在の北海道函館市)に建造された稜堡式の城郭である。長野県佐久市の龍岡城など、当時日本で建造された星形の城郭を「五稜郭」と通称するが、一般に「五稜郭」といえば函館のそれを指すことが多い。

建造中の名称は亀田御役所土塁(かめだおんやくしょどるい)、完成後の名称は箱館御役所(はこだておんやくしょ)。柳野城(やなぎのじょう)とも呼ばれる。国の特別史跡に指定され、「五稜郭と箱館戦争の遺構」として北海道遺産に選定されている。

日米和親条約締結による箱館開港に伴い、防衛力の強化と役所の移転問題を解決するため、徳川家定の命により築造された。設計を担当したのは洋式軍学者の武田斐三郎。大砲による戦闘が一般化した後のヨーロッパにおける稜堡式の築城様式を採用し、堡を星型に配置している。総面積、74,990坪(約247,466m²)、施工は土工事を松川弁之助、石垣工事を井上喜三郎、奉行所の建築を中川源蔵が請け負った。

当初は外国の脅威に立ち向かうために築造が計画されたが、脅威が薄れていくとともに築造の目的が国家の威信になった。

費用不足もあって、当初の計画は縮小された。半月堡も大手口に一箇所しか造られなかった。本来のヨーロッパの稜堡式の築城様式であれば、半月堡は二重、三重に築かれて縦深防御を構成したが、たった一箇所の半月堡ではかなり見劣りがする。

また箱館開港時に政庁箱館奉行所がおかれたが、大砲の標的となることを防ぐ目的で建物を低く設計したため、政庁を置くスペースがなくなった。純軍事施設としての建造が本来の稜堡式の築城様式であり、これは目的に叶っていない。

当時の日本の城郭は、政治的変化や戦争と銃砲の発達を経験したヨーロッパと異なり、居住施設である宮殿と軍事施設である要塞の分離がほとんど行われておらず、居住施設(五稜郭の場合は役所)と軍事施設を兼務していた。そのため見かけだけの西洋式築城であるという評が一般的である。五稜郭以外に洋式築城が用いられたのは龍岡城や明治維新後の松尾城などであり、このほかに前橋城が部分的に擬似洋式築城を用いている。また、松前城や五島石田城など純和式の城郭に砲台を追加したものなども築造された。そのような旧式の城郭が大砲を備えた近代戦の攻防の舞台となればどういふ目に遭うかは、会津若松城・白河小峰城の休戦後の写真を見れば明らかである。

実際、箱館戦争の際、写真にあるように箱館奉行所の建物の天辺にある楼閣が、官軍の軍艦の艦砲射撃の格好の標的となった。それを知った旧幕府軍は慌てて楼閣部分を撤去したが、射撃角度をかなりの精度で知られてしまい、要塞内に次々と着弾、最早この時点で要塞としての機能は麻痺していた。

防御壁としては土塁を築き、砲弾のショックを吸収するのが稜堡式の築城様式の特徴である。しかし、五稜郭の場合は土塁を築こうにも北海道の寒冷な気候に適合せず、冬の間に凍った土塁が、春の温かさで崩壊するという困難に直面した。そのためわざわざ石垣を築き、その上に土を盛るという手間をかけている。なお、土塁に固執しなくとも、南北戦争のサムター要塞のように、柔らかい煉瓦を使うという方法もあった。

一番の問題としては、既にヨーロッパでもこのような稜堡式の築城様式は、いささか旧式化していたことである。堡壘を重ねるのは小銃を防御兵器として用いるための方式であり、当時のヨーロッパでは大砲を掩体壕に据えての防御へと移行しつつあった時期である。現に同時期の普仏戦争において、フランスの稜堡式の要塞はプロイセン王国軍に簡単に突破・攻略され、要塞形式として旧式化していることを露呈して

いた。稜堡式の陣地を築いた例は近現代でもあるが、あくまで野戦築城であり、恒久的な要塞としての築城例は無い。ちなみに同時期に東京湾に築かれた台場は、大砲を用いる要塞施設である。

江戸時代

- 1857 年（安政 4 年） 工事開始。同年、箱館通宝発行。
- 1864 年（元治元年） 組立開始。この年箱館奉行所を宇須岸館（別名・河野館または箱館）跡（現在の元町公園）から五稜郭に移した。
- 1866 年（慶応 2 年） 工事完了。

Wikipedia による

